

## 佐久市・兜岩山の植物採集

山 崎 惇

昭和55年9月27・28日、長野県植物研究会の例会が長野県東部の佐久市内山の兜岩山（1368m）で行われた。奥原弘人、大木正夫、斉藤定美、堀米富平、草間博、池田登志男、中山冽、小林春雄の諸氏と幹事の山崎の他地元教員3名、計12名が参加した。

兜岩山は、上信国境関東山地の中央部荒船山のすぐ南側に位置し、関東平野と信州との境にある。地質は、山頂部が荒船安山岩類からなり、その山ろく部に山の北部から兜岩層、駒込層、内山層と山足に向って変わってきている。いずれも第三紀層であり佐久地方としては古い方に属する地質である。初谷鉱泉は、内山層からできている。気候的には、年間雨量1200mm前後、年平均気温8℃で、乾燥した寒さのきびしい内陸の気候を示している。

第1日の27日は、相肉の豪雨に見舞われ、調査はできなかった。第2日目は朝から晴れ上がり、宿舎の初谷鉱泉のまわりを早朝有志で採集した。この付近は永年の伐採の繰返しにより、ミズナラを混じえたいわゆる雑木林の二次林を形成している。特に珍しいものはなく、オオモミジ、ムラサキシキブ、ハクウンボク、ミヤマハハソ、オニイタヤなどの下にオウレンシダ、モミジガサ、ウスバサイシン、ヒゴクサ、川沿いには、ヨシやハッカが見られた。

朝食後、館ヶ沢よりいよいよ目的地兜岩山へ向う。海拔950m。沢筋に沿って登る。ハルニレ、タツノヒゲ、ミヤマクマワラビ、ジュウモンジシダ、ウワバミソウ、タマアジサイなどやや湿生の谷川沿いの植物が目立つ。又、ギンバイソウ、ツヤナシノデ、ヤブデマリ、コアジサイなど西日本に分布の中心をもつ暖帯系の植物、タニミツバ、オオガクビソウ、ヤマモミジなど北日本ないし裏日本系の植物が混生している。海拔1100mの渡川点。小さい沢の合流点でやや開けた地形。当地方では珍しいキバナウツギを池田先生が紹介。バイカウツギ、ヒメウツギ、ツクバネウツギ、コゴメウツギなどスイカズラ科の植物が目立つ。その他、アサノハカエデ、チドリノキ、トチノキ、オヒョウなどの湿性の夏緑広葉樹林内に、カンスゲ、ウマノミツバ、ヒカゲミツバ、ラショウモンカズラ、クワガタソウなどが見られる。

1200mの尾根筋にかかる。田口村との境界線であ

る。ヤマツツジ、トウゴクミツバツツジ、ミツバツツジ、アブラツツジ、サラサドウダン、ホツツジなどツツジ類が低木層に多くなる。急な階段の遊歩道に入る手前、尾根の南側の岩場で、ミヤマウラジロ、ウチョウランなど珍種を採集。尾根筋には数mの低いブナやナツツバキが出て来る。岩場には、ダイモンジソウ、イワヒバ、フクロシダなどが付着しており、山道沿いの林床には、サワフタギ、コハウチワカエデ、タカノツメ、ナツハゼ、ヒロハノツリバナ、コミネカウデ、アオハダ、ヒトツバカエデなどの低木類、チゴユリ、ミヤマナルコユリ、シュロソウ、ナンタイシダなどの草本類が生えている。途中大きな鞍部の岩場で、トガクシナズナ、イワキンバイ、コガネシダ、イワタバコ、イワギボウシ、ツルデングなど珍しい種を交えた植生にしばし足を止める。スズタケの密生する山道をかきわけて登り、ようやくにして兜岩山頂へたどりつく。こゝは、荒船安山岩類の岩場で植生は貧弱である。センブリが大量に採れたのには驚いた。その他、クロカンバ、セイタカトウヒレン、オオバマンサク、アマニュウ、オオバショウマ、ミヤマアホダモ、キンレイカ、ネズミサシなどが見られる。

わずかに道を引き返えして、荒船不動への降り口へ出る。細い切り立った尾根にホソバコオニユリ、ヒモカズラが見られた。北斜面の湿った岩場には、クモノスシダ、コイワザイラなどの珍種やクロクモソウ、タマガワホトトギス、シラヒゲソウ、マルバイチャクソウなどが生えていた。更に少し下だった所にレンゲショウマの大群落があった。又、御岳山へ向う途中のアカヤシオでうめつくされた嶺線の景観も美事であった。この地域の特徴は、寡雨冷涼な気候下にながら20種以上もの暖帯系の植物が全域にわたり多量に分布していることであろう。

○前記以外の主な出現種はオオウバユリ、ニシキウツギ、キバナアキギリ、セキヤノアキチョウジ、イヌブナ、ナガバノコウヤボウキ、アズマシヤクナゲ、ホソバシャジン、エゾハタザオ、フクオウソウ、イワハリガネワラビなどであった。